

第4章 オープン・スタジオにおける番組参加者の志向性

-参加フレーム・マイク・リスナー-

FMやまのは班

1 問題

7月6日のFMやまのは⁽¹⁾のオープン・スタジオ⁽²⁾での様子が撮影されたデータを分析するにあたり、私をはじめに注目したのは、番組の終了場面であった。〈断片1〉は、午後2時40分ごろから放送された番組「フォーティーン・セイリング」の終了直前の場面で、3節で分析する〈断片4〉の音声だけを書き出したものである。

〈断片1〉：データY：3:34' 25"~3:34' 35"⁽³⁾

01 M：=(これまで)お届けしてまいりました、今日のお相手はわたし

まつやまだこう(い)ちと：:

02 (1.0)

03 S：サミュエルと=

04 Y：=ディージェーやすと

05 H：ほりせいだいで

06 (1.0)

07 M：そして

08 (1.6)

09 C：つばめのチャンチャンでした:=

10 M：=このあと、チャンチャンスペシャルお届けhしてまいりま：:す

M、S、Y、H、Cは、いずれもFMやまのはのメンバーで、かつこの番組の参加者である。番組を「届け」てきたかの女/彼らは順番に名乗り、この後に番組「チャンチャンスペシャル」が放送されることを公表している。

私には、参加者の名乗りが、特にHとCとの間がスムーズになされていないことが、たとえFMやまのはが営利を目的とした放送でなく、参加者がプロではないとしても、不思議であった。「つうじょう我々は、相手の外的な振る舞いに、内的な心理状態を対応させるなどといったことをしなくとも、端的に、お互いの行為を理解・記述・報告することができる」[森田, 1997: 103]から、Cは、Hの次に発言するのを期待されていることを理解しているはずである。

ところで、〈断片1〉の9行目のCの発言は、CがCの左隣に位置するSの前に置かれているマイクを使用してなされていた。FMやまのはでは、マイクが置かれたテーブルを囲むように参加者が椅子に座っているのだが、おもしろいことに、この時点においてCの前にはマイクは置かれていなかったのである。

ここでは、七夕を話題としたMに、Sが、Mは個人的に七夕の日にどのようなことをするのかと尋ねたところ、Mが答えに詰まったので、SはCを振り返って見て「七夕ってなにをするの」と尋ねている。図1はそのときの静止画像データである。そしてCはSの質問に答えて発言している。

ここで注目すべきことは、SがCを見て話している、そのしかたである。このSのふるまいには異なる二つの志向が含まれている。ひとつはCに対する志向で、もうひとつはマイクに対する志向である。Cに対する志向については、SがCに視線を移しているのが図1から明らかであるので、問題ないであろう。しかし、Sのマイクに対する志向には若干の説明を必要とするであろう。

そこで図2を見て頂きたい。Sが、①のマイクに正対している状態から、Cを志向つまりCを見ようとする、②で示されるように口もとがマイクから離れてしまう。ゆえに、Sが、2つの異なる志向を両立させるためには、③のように顔をマイクに向かって左側に移動させる必要がある。

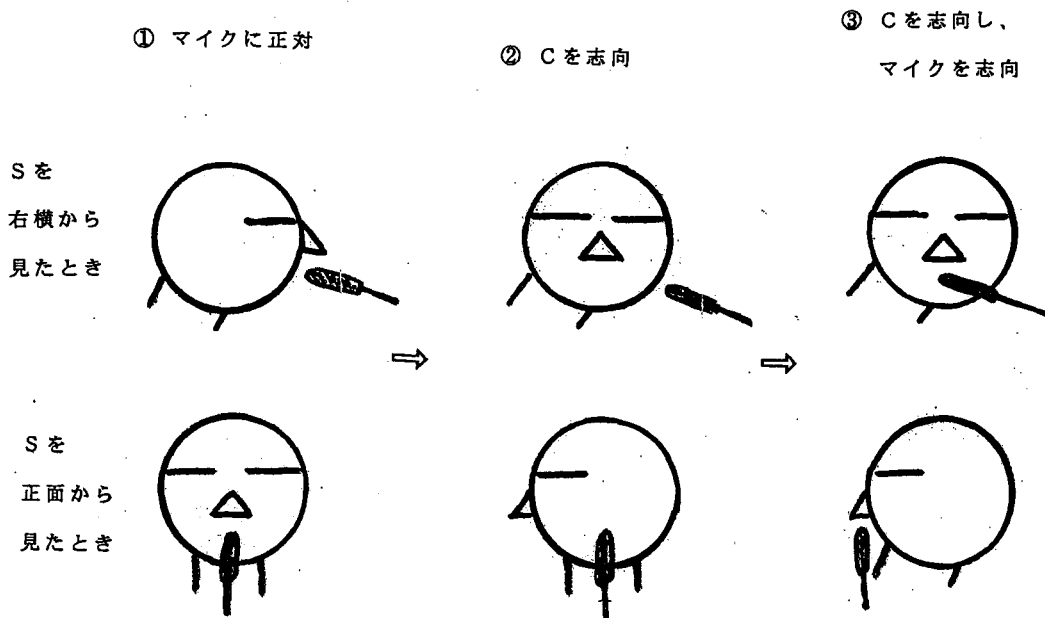


図2 SのCとマイクの志向の図式化

参加者は、番組のなかで放送すべき会話をするときには、いつでも会話できる体勢をとっている。それはマイクを志向していることを示しているが、それだけでは明確さに欠ける。しかし<断片2>の分析は、参加者がマイクを志向している証拠となる。

マイクを志向するということは、どうじにマイクを通して放送される会話を聴いているリスナーを志向しているということである。その証拠として<断片3>についての分析を次に示す。

<断片3>においては、場面全体にわたりスタジオのそばを通過するジェット・スキーの走行音が響き、またスタジオのそばを、買物をしているとMが判断した2人の女性が歩いている。視線の向きと発言の内容から、Mはその女性に向けて発言している。図1はそのときの静止画像データである。

Mは「買物をしている」2人の女性に話しかけているのであって、他の参与者、つまりS、Y、H、Cに話しかけているのではないということは、他の参与者がMに視線を送るなどの反応をしていないし、Mもそのことを不思議がっていない、ということからも示される。Hだけは反応しているようなふるまいを見せているが、それはHが歩道に面した位置に座っており、歩道を歩く女性へのMの視線を誤って受け取ってしまったからだと思われる。

Mの発言とふるまいは、オープン・スタジオにおける放送らしさ、つまり番組のライブ感の演出であり、そのことはまずMがリスナーを志向していることを示している。また、他の参与者も反応しないことによってライブ感の演出に参加していることから、リスナーへの志向をもっていることが分かる。

3 参与フレームから見える参与者たちの志向

これまで、参与者がラジオ番組らしくふるまうそのしかたとして、参与者がリスナーを志向していることについて述べてきた。これからは、番組のなかの参与フレームに注目して参与者がリスナーを志向していることを示しながら、あわせて、私自身の疑問である「参与者が目の前のマイクを所有している／していない」ように見える部分についても、私なりの説明を試みる。

西阪によれば、「参与フレームは、参与者たちの参与のしかたであり、どうじに参与者たちが参与している場面設定における出来事を経験するための枠組」[西阪, 1992: 61]である。すなわち、参与者の位置や向き、体勢のありかたであり、その形式のなかで、場面場面における参与者のふるまいが有意味なものとして参与者自身や分析者に認識されていくのである。

<断片4>は、1節で少しふれたが、午後2時40分頃から放送された番組「フォーティーン・セイリング」の終了直前の場面である。また、図4、図5、図6は、それぞれ<断片4>に示した時点での静止画像データである。



図4 SとYはマイクに正対 カメラI (3:34' 25")



図5 SとYはマイクから離れる カメラI (3:34' 28")

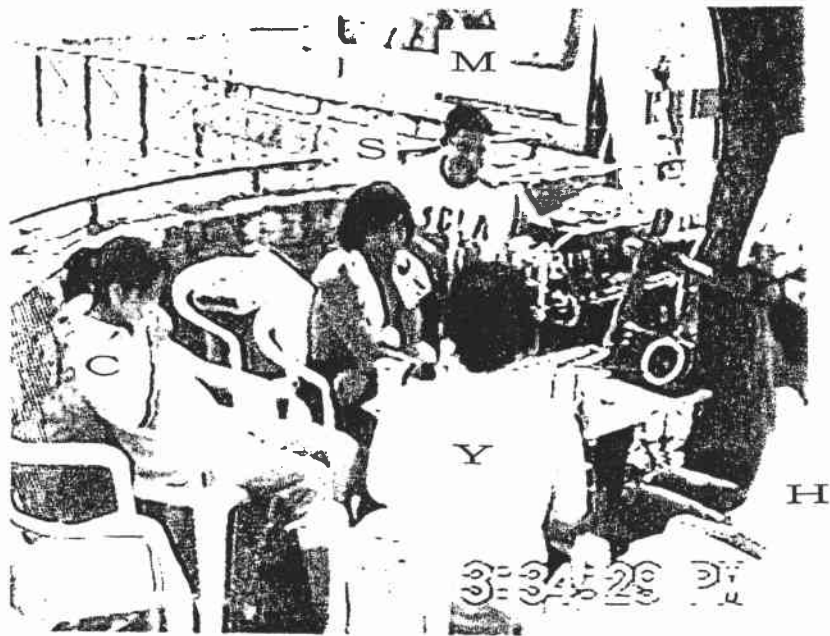


図6 SとYが再びマイクに正対 カメラI (3:34' 29")

図4、5、6を見ると、次のようなことが分かるだろう。参加者は、マイクが置かれているテーブルを取り囲むように座っている。マイクはS、Y、Hの正面には置かれているが、Cの正面には置かれていない。参加者の座っている椅子とテーブルとの位置関係について言えば、S、Y、Hの座る椅子に比べ、Cが座る椅子はテーブルから離れている。

<断片4>で何が起きているのかについて細かく見ていこう。この場面の前に、MはH、Y、Sにこの順番でコメントを求めている。そしてそれに続くMの「これまでお届けしておりました、…」という発言の間にSはMを見て、続いてYに視線を移しながら2回うなずいている。その後SとYはマイクから離れ椅子に深くもたれ、さらにYはアイスを食べようとしている。その後、Mが自分の名前を名乗るに至ると、S、Yは体を起こしマイクに近づき、それぞれ名乗っているが、Cは椅子にもたれたままで体を起こさない。Hはこの間一貫して、マイクに接近はしていないが椅子にもたれてもいない体勢を続けている。Hの発言の後、MはCを見ており、CはHからMへとゆっくりと視線を移している。MはHの視線を獲得したとき、「そして」とCの発言を促し、Cは身を乗り出してSのマイクに近づき発言している。そのあとMは、番組「チャンチャンススペシャル」がこの後放送されることを発言して、番組を締めくくっている。

参与フレームの観点から<断片4>の様子を見てみる。SとYは、まだ番組が終了していないにもかかわらず、マイクから離れ椅子に深くもたれたということ(図5)、いつでも発言できる体勢を崩したということであり、もうこの番組中では発言をする必要がないと判断したことが推測できる。しかしながら、その後に名乗るという発言をする必要が生じ

【右手で持っている缶ジュースを左手で持っているコップに入れる】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCKKK

M : ちゃh//ははは =どんな番組やねん(2.0)

【Mのほうを見る】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCFFFCFFFFFFFFCCCCCCCCCCCCCCCCC..MM.CCCCCCCCCCCC

S : //どこいっちゃうんだよ= 天気もいいし

CCSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

Y :

CCCCCCCCCCCCCCCCC...SSSSSSSSSSSSSSSSSSFFMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM

H :

【笑いながら椅子にもたれる】

【マイクに向かう】

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSFF (分析不能) SSSSSSSSSSSSS

C : //はhはhはh//はhはh

【コップのジュースを飲む】

#####

M :

nod

CC

S : どこいこうかなっていう= ねえ

SS

Y :

SS

H :

nod nod

SS

C : =そうですね はい



図7 番組「チャンチャンススペシャル」 カメラ I (3:45'23")

<断片5>は、この番組の仮のタイトルである「チャンチャンススペシャル」に代わる適当なタイトルをSとCが話し合っている場面である。Cの提案した「チャンチャンチャンどこいくの」に対して、Mが冗談半分で番組の内容がよく分からないと指摘したため、SとCが説明を加えている。

椅子やマイクの配置については、前の番組「フォーティーン・セイリング」のときとあまり変わらない。しかし、参加者の位置や体勢は大きく異なっている。まず、HとCの位置が入れ替わっている。つまり、Sと対面する位置にCが座っている。SとCは、互いに向き合い、視線を送り、会話をしている。それに対して、Mはマイクから離れ、もっぱら放送機器の操作に集中しており、Y、Hは椅子に深くもたれ続けている。

私には、参加者が番組の参与フレームを成り立たせているそれぞれのふるまいを維持し続けることによって、全体としてリスナーへの志向が作りあげられているように思われなければならない。<断片4>におけるCと似た立場と思われる、<断片5>のYは、椅子に深く座り続けることで、全体としてのリスナーへの志向の一部を担当していたのではないか。このYは、Yの前にあるマイクを所有しているようには見えないが、むしろ私たちに「マイクを所有していない」と思わせるふるまいをし続けることで、全体としてのリスナーへの志向を作りあげていたのではないか。

4 おわりに

ラジオ放送の参加者は、番組のなかでさまざまなしかたでリスナーを志向している。そ

のやりかたのひとつにマイクへの志向がある。しかし、リスナーの志向は、参加者のそれぞれがべつべつになしているのではなく、全体としてなされているのではないか。また、「参加者が目の前にあるマイクを所有している／所有していない」ように見せる参加者のふるまいは、リスナーを志向することのひとつのやりかたではないか。

注

- (1)徳島市のある公園で毎週土・日曜日に開局されている。新町川を守る会の下部団体でメンバーは皆ボランティアである。リーダーであるM氏によると、電波を飛ばすことが目的ではなく、FMという手段を用いることで人が集まってくる、ということが目的であるそうだ。
- (2)FMやまのはは、公園にスタジオを作っているため、ふつうの放送局のように、内と外との仕切りが全くない。だから、参加者は自由に道行く人々に話しかけることができるし、外の情報をただちに番組に取り入れることができる。ただし、どうしても放送機材は限られた質と量になってしまう。
- (3)ここで使われているトランスクリプトについては、第1部の記号一覧表を見よ。

参考文献

- 森田聡之(1997)「気にすること・無視することの分析可能性」、『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:99-122.
- 西阪 仰(1988)「行為出来事の相互行為的構成」、『社会学評論』,154:102-118.
- , (1992)「参与フレーム身体的自己組織化」、『社会学評論』, 169: 58-73.
- , (1997)「語る身体・見る身体」、『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:3-29.
- 岡田光弘(1996)「『制度』を研究するということ —インタビューと119番通話の終了部の会話分析—」『現代社会理論研究』, 6: 165-180.
- 岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男(1997)「救急医療現場の社会的な組織化」、『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:168-186.
- Schegloff, Emanuel A. & Sacks, Harvey 1973 'Opening up Closings' *Semiotica*, 8(4): 289-327. = 1989「会話はどのように終了されるのか」北澤・西阪 訳『日常性の解剖学』pp.175-241.
- 山崎敬一・好井裕明(1984)「会話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」,『言語』,第13巻,7月号:86-94.
- 山崎敬一・佐竹保宏・保阪幸正(1993)「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力—<車いす使用者>のエスノメソドロジー的研究研究—」,『社会学評論』,173:30-46.

◎第1版と第2版の異同について

第2版では、第1版の誤植を訂正したほか、「研究概要」および「放送人においてレリバントなことー放送関係者養成専門学校を訪ねてー」が付加されている。

ラジオスタジオの相互行為分析

ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー

1998年 2月 3日 第1版発行

1998年10月17日 第2版発行

編集 榎田美雄

発行 徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース
現代国際社会分野『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト

〒770-8502

徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

☎(0886)56-9308 (榎田研究室)